

風が吹く中で

榎

尚子

被災者アパート

戦争で家を焼かれた我が家は、戦後二年たってようやく東京でいっしょに暮らすことができた。目黒区中根町というところにある被災者用のアパートだった。

アパートは石づくりの暗い建物だったが、住めるところがあればそれで十分で、どの部屋も人でいっぱいだった。ほとんどが六畳一間に小さな台所があり、階の一番奥に共同トイレがあった。そこは日中でも薄暗く、行く時はいつも母に連れていってもらった。

わたしが病気ばかりしていたのもそのころで、食糧事情もよくなかった。でもどの家も貧しかったので、家族三人が一緒に暮らせる喜びの方が大きかった。

父は高校の教員をしていたが、傍ら牧師になる志を持ち、勉強していた。以前神学校で教えてもいたので牧師検定を独学で学び、やがて資格を取った。

教会も建物もない中で、「中根伝道所」として自宅の六畳間で礼拝を始めたのは戦争が終わって五年後である。日曜日ごとに遠くの教会に通っていた我が家はそれ以後自宅が教会になったのである。

礼拝はしばしば私に通っていた幼稚園や園の保護者の家で行われることもあった。またアパートの礼拝に近くの部屋の家族や親せきの若い人たちが来るようになった。土曜日の

午後は母が近所の子供たちを集めて駅向こうの柿の木坂教会へ連れて行つた。当時はその教会は大盛況で、小さい子は土曜日に礼拝をしていたのである。

ご飯の前にはお祈りをする、寝る前にはお祈りをする、そして日曜日は教会の礼拝がある、それが日常だった。

ある夏のことである。外で数人の子供と遊んでいた時、突然の頭痛に我慢ができなくなつた。覚えているのはそこまでである。気がつくと、アパートの部屋で寝かされていた。たまたまその日は母が外出中で、周りには父と近所のおばさんたちがいた。

「この子、うわごとを言ってる」

と誰かが言つた。意識がなくなつた幼児をアパートのおばさんたちが看病してくれたのだつた。分かると言おうとしたが声が出ず、そのまままた眠ってしまった。今でいう熱中症か。幼いころの病氣の話になると両親はいつも同じことを言つた。

「神様はあなたにご用があるから病氣を治してくださいさつた」

この言葉は生涯私の中に残る言葉となつた。

このアパートの中からクリスチャンになつた家族が何人かいた。やせた土地だったが、神さまは風を起こし、福音の種を豊かに実らせてくださった。

一年後、我が家は練馬区下石神井に引越し、教会の拠点を得た。

信仰のルーツ

ポーンクリスチャンという言葉がある。私はまさしくそれだ。

父は岩手県の田舎で生まれた。農家の二男で、大きくなったら外に出るのが普通だった。たまたま勉強が好きだった父は岩手の中学校から仙台の旧制高校に進学した。まだほとんどが高等小学校を出ると働いていた昭和初めである。

そのころ仙台二校の英語教授に詩人の土井晩翠がいた。土井家にはいつも二校学生が書生として送り込まれていた。岩手から仙台に出てきた父はその書生を五年間務めることになったのである。

郷里で学校に進んだのは父一人である。学費のために相当お金の工面をしたであろう。自分だけが高等教育を受けることになったことは、生涯の重荷となった。

その土井家で父はキリスト教に出会ったのである。土井家の夫人と長女は熱心なクリスチャンだった。受洗したのは仙台教会、今の仙台青葉荘教会である。

何年か経って甥や姪がキリスト者になった。何かあるとよく相談にきていた彼らはやがてそれぞれの地で教会に行くようになった。東京の叔父さんはその生き方をもって伝道していたのだ。

母も仙台出身だが、キリスト教に出会ったのは東京で、親戚の勧めだった。熱心な誘いに一度だけと行った淀橋教会で捉えられたのだ。母親が、兄弟たちがクリスチャンになるのに時間はかからなかった。

戦時中、父母は結婚したが家は戦争で焼かれ、東京で神学校の教師している父を残し、母は実家のある仙台へ行った。そのころ仙台では祖母や叔母たちはすでにクリスチャンになっていたが、ホーリネス仙台教会は弾圧され、教会は閉鎖していた。

戦後は一番苦しい時代だったと誰もがいうが、あの頃はどの家も貧しかった。六畳一間のアパートで牧師検定試験の勉強を続け、合格したのは戦争が終わって四、五年後である。一昨年、私は目黒のアパートを訪ねた。なんと同じ名前ですそのアパートは今も続いている。ひと家族、向かいの部屋の家族に会うことができた。

「別所さんのこと、覚えていますか」

全く記憶になかった。しかしその名前にかすかな感覚がよみがえってきた。婦人伝道師で母上と一緒に住んでいる方だった。どうやらその方の紹介でそのアパートに住むようになったらしい。昔から住んでいる方はその後教会につながりクリスチャンになっていた。

神様はいつでもどこかで必要な風を送って下さる。

受洗 大人への日々

わが家の全てを開放しての開拓伝道は、それは活気に満ちていた。

日曜日の朝になると家族全員（と言ってもたった三人）で会場作りにかかった。八時半には日曜学校の先生が来るし、九時前には近所の子供たちでいっぱいになった。

十時ごろになると、子どもと入れ替わりにおとなの方が見え、礼拝、食事会、午後の集会と続き、いつも家には人がいた。

当時、父は高校の教師をしていたが、生活の中心が教会だったから、相当質素な暮らしをしていた。友達の家にあるものがわが家にはなかったし、制服のある学校に通っていたがみな母の手作りの再生品だった。うちは少し友達の家とは違う、と感じていたが、劣等感を持つたりうらやましがったりしたことは全くなかった。遠くの学校に通う私を母は毎日祈って送り出してくれた。日曜日の学校での会話はお出かけではなく、いつも教会のことだった。両親が大事にしているものを子ども心にわかっていた。

小学生のころはあんなに熱心に教会に来ていた近所の子供たちが、中学生になるとぱったり来なくなった。そのころになると、キリスト教というものが少しわかるようになり、日本の社会での伝道の難しさも理解できるようになっていた。

中学二年生の夏、家庭礼拝をしている時、突然私は自分がどんなに罪深いか気づかされた。それまで自覚したことのない体験だった。頭でわかっていたことが直接私への神様からの言葉として迫ってきた。この時、生涯イエス様を信じていこうと決心した。

「お父さん、お母さん、わたしは神様に従っていきたい」

「高校生になったら洗礼を受けるといいね。それまで待ちなさい。あと二年間その気持ちが変わらなかつたらね。それまで祈りなさい」

受洗は高校一年生の時である。

しかし小さな教会の中で信仰を育てていくのは大変なこともあった。高校生の全国集会に出たり、大学生になってからはキリスト教青年会に行ったりして、世界を広げていった。小さい池から湖にそして海へと、私の信仰はそれで良いのかとふるいに掛けられていった。

社会人になって選んだのは教員の仕事である。子どものころからの夢だった。

結婚したのはそれから三年後。相手はきちんと教会生活をしている人しか考えられなかった。クリスマスホームを作っていく喜びでいっぱいだった。結婚したとき、共に祈ること、食事はなるべく一緒に取ること、礼拝では隣に座ることを約束した。教会奉仕もできる限りやろうと話し合った。

かわいい女の子が二人与えられ、私たちは親になった。

二人の娘たちはそれぞれよく成長した。

三世帯家族で親以外の人、祖父母から得たものが大きかった。クリスチャンホームで育ったので、教会の方々との交わりも多く、「うちの子は教会に育てられたようなもの」と私はよく言っていた。相談できる大人が周りにいたことが彼女たちにはとても良かった。勉強もよくできたし、早くから自立していた。

ふと体のことが気になって病院に行ったのは四十代半ばだった。すぐに入院検査となり、心の準備もできないまま、手術台の上の人となった。

それまで順調に回っていた私の生活はそこで何もかもストップした。何が悪かったのだろう。家庭生活も問題ないし、教会も体を張って多くの奉仕をしていた。小学校での教員生活も楽しかった。無理も不摂生もしていなかった。

当時は「がん告知」という言葉がある時代だった。がんすなわち死の病と捉える人もいた。病室でも看護師さんから「病名は他の患者に言わないように」とさえ言われていた。

小さいころから神は最善をなしたもうと教えられてきた。この病は私にとって最善なのか。手術は成功し、一ヶ月後に退院、しばらくしてまた学校に戻る予定でいた。

苦しみが始まったのはその後である。初夏に手術したのに、その後入退院を繰り返して、落ち着いたのは冷たい風が吹き始める秋の終りだった。

三回目の最後の手術を受ける時、私は全く打ちのめされていた。神様はなぜこのように苦しみをお与えになるのだろうか。私はこれからどう生きていきたいのだろうか。普通なら四十代、人生で最も花を咲かせられる時ではないだろうか。熱と痛みで自分では何もできない体で、窓の外に広がる秋の雲を見ていた。

はじめ、私は相当突っ張っていた。「お大事に」といわれるのも嫌だった。それまで多くの人を見舞い、慰めの手紙を書き、祈ってきた。しかし自分がされる側になると、温かい言葉を素直に受け入れることができないこともあった。自分は満ち足りた側に立って見舞っていたのだろうか。なぜイライラするのだろうか。

病んでみて初めて気づくことだった。病まなければいつも恵まれた環境で論じていたかもしれない、そんなことにふと思いついた。

病後は少しずつ社会復帰をしていった。その一つが日本クリスチャン・ペンクラブへの参加だった。その頃、ペンクラブは満江巖先生を中心に多くの人々が書き、読み、学んでいた。満江先生のかげ声は時に過剰とも思えることもあったが、会員の方々に支えられていつしかなくてはならないものになっていた。

社会の一員として

三十代、四十代は家庭に社会に教会にとよく動いていた。

両親は教会のことで精一杯、我が家もクリスマスチャンホームとして四人がそろうのは日曜日だけ、教会生活が家庭生活のような数年間だった。

私は小学校教員として講師をしたりして途切れることなく仕事をしていた。

病気になるまでは私はあれもこれもと時間の限り飛びついていて、それではいけない、これからは丁寧になさないと気づかせてくれたのが病気だった。

選ぶこと。時間も健康も有限だ。これからは選ばなくてはいけない。

私が選んだのは二つである。一つは人の話を聞くこと。世の中にはなんと多くの人が話を聞いてほしいと思っていることか。私も聞いてほしい。受け入れてもらっているという安心があるから他の人の話も聞くことができるのだ。一年半の研修を経て電話相談員になった。人の話を聞くことはほんとうにむずかしかった。傾聴の学びをしつつ電話の前に座っていた。一人になるとくたくただった。

もう一つは子供の本である。絵本から始まり児童文学の世界に夢中になった。それまで小学校で子供に読み聞かせをしたり自分で選んだりと触れることは多かったが、たまたま

巡り会った「東京子ども図書館」で学ぶ機会を与えられた。もしかしたら児童文学は私のライフワークになるかもしれない、そんな気がした。

クリスチャン・ペンクラブでは横山麗子先生を中心に「児童文学部」があった。例会で多くの方から刺激をいただいた。当時の指導者・満江巖先生からは創作をすすめられた。人生を児童文学に託して出された本の魅力にすっかり捉えられてしまった。感銘を受けた児童書を人にも紹介したいと思い、少しずつ場を広げていた。

病気をきっかけにもう仕事はもうしないとして断り続けていたある日、以前に勤務していた学校から図書館を手伝ってほしいという依頼が来た。

学校図書、これは私がかねてから夢にしていた職場だった。司書教諭の資格も取っていた。本が好きで若い頃から図書館通いしていた。東京子ども図書館の受講やクリスチャン・ペンクラブでの学びなど、ただ好きだからということだけで続けていた。それぞれは小さなことだが、大きな流れに導かれているような気がした。創作や童話に関するエッセイなど取り組んできたことは神様の導きだったかもしれない。

四十代最後、二年間のブランクを経てまた学校に通うこととなった。家族の応援があったからこそその再就職だった。風が吹いたと思った。

その職場は図書室を入り口に次々に道が開かれ、定年までお世話になることになった。

介護の中で

父はインフルエンザの後肺炎になり、一ヶ月の入院生活の後、召されていった。

母はその後、昼間の長い時間を一人で過ごすようになった。六人家族はあつという間に二人になり、母と私の静かな暮らしが続いた。私が専任になったのは六十の時である。

フルタイムの仕事になった私は多忙であり、家と職場と教会以外は何もなく、慎ましい日々だった。しかし神様は「平穩」という素晴らしいプレゼントをくださっていた。ゆっくり食事できる夕食は二人の至福の時だった。その間だけは一日の報告をし合い、食後のお茶とお菓子を楽しんだ。

これは大変と気づいたのは家の中での数回の転倒の後である。朝夕は私が、昼はヘルパーさんが食事を用意と規則正しい生活をし、通院なども休暇をとってなんとかやりくりしてきた。が、言動が緩慢になり、記憶があいまいになり、不思議な会話が増える中での転倒事故だった。すぐに救急車で病院に行ったが、それが「最晩年」の始まりだった。

誇り高い家庭に育った母は、それまで人の世話はたくさんしてきたが、何もかもやってもらう病院や施設の暮らしになじめなかった。お世話してくださる方と母の間に立って、両方が気持ちよく過ごせるように気を使ったものである。

職場の方々にはたくさん助けてもらった。教会の方々にはいつも祈っていた。遠くにいた夫や娘も都合をつけて駆けつけてくれた。しかし私はあまりの多忙さに心がすり減っていた。一人っ子の私は何もかも自分で決めなければなかった。どうしていいかわからず、その中でよい判断をテキパキとすることが求められた。何より時間がなかった。

ある日のこと、母の受け入れ先の相談のためある施設に赴いた。十回の入院でもう受け入れ先がなくなつた話を聞いてくれた人は「大変だったでしょう」と一言ぽつんと言つた。私は思わず涙がこぼれそうになつた。

初めて会つた通りすがりの人の声がけに、なぜ私は感激したのだろう。その人は業務上の言葉を発しただけかもしれない。しかし私は今までにない「温かい言葉」を聞いた思ひだつた。それまで数多くの思いやりに満ちた言葉を受けてきたが、私の心には届かなくなつていた。彼女の言葉を通して神様が働かれたのだった。

最後の施設は療養型病院だった。東京勤務になつた夫も応援してくれた。母はいつも「神様は私の老後を通してあなたに老いを学ばせてくれている」と言つていた。その通りだった。母の最後の日、二人だけの部屋で聖書を読み讃美歌を歌い続けた。「主が与え、主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな」（ヨブ記一章二一節）

夏の暑い日、母は旅立っていった。お手本とする両親は今は神様のもつた。

主よ、終わりまで

二人の娘たちは育つて家を離れた。私どもの親はそれぞれ旅立った。夫もわたしも社会の仕事を終え、少しばかり広くなった家に二人で暮らすようになって何年たつだろうか。世の中は長寿社会になり、年寄りの生きがいを求める様々な情報が溢れていた。

退職前にふと吉野弘の詩集を見ていると『冬の陽ざしの』という詩に目が止まった。海岸沿いを散歩している詩人はきれいなガラスのかけらを見つけた。それは捨てられた瓶やコップのかけらだった。本来の役目を終える前にもう一度新しい役目を与えられたものだった。波にもまれ美しく磨かれ人を喜ばせるという役目を。わたしもそんな生き方をしてみたいと思った。

職場と教会と家庭、これらを中心に多忙だった毎日にたっぷり時間が与えられた。時間割は自分で決めてよい。まずは頭が少しでも柔らかいうちにと生徒になってみた。小さい子に先生として教えていたが、生徒になつて教えてもらうとはなんと楽しいことだろう。キリスト教関係の講演会には時間が許す限り通つてみた。連続講座を探すこともあった。先生は教師だけとは限らない。その道に長く携わつておられる方は立派な先生だ。

ボランティアもわたしの長年の夢だった。技術を要するものも単純作業もあったが、そ

の先にいる誰かとながるとき、それは大きな喜びになった。その一つは絵本だ。絵本を読む会に入り、高齢者施設や子供の施設に出かけていく。なんと多くの優れた絵本があるか、それを伝えていきたい。とくに人生を考える絵本はどの世代にも届けたい。わずか数ページの言葉と絵が読み手も聞き手もある世界に連れて行ってくれる。児童文学は私の生涯のテーマだった。ボランティアは続けることが大事だ。

遊ぶことも多くなつた。忙しい頃は考えられない贅沢な時間だった。

教会では通信を大事にしている。いろいろなことで教会に来られなくなった人がいる。とくに高齢者や病者だ。その方に一枚のはがきを書き、一通の便りを出す。教会はあなたを待っているよ、忘れないよという思いを込めて。季節にあった切手を貼りポストに入れるとき、神様届けてくださいと祈る。これはペンクラブで教えられたことだ。

母がわたしの年の頃はどうかだろうとふと考える。体も頭もよく動いていた。教会に仕え、趣味の書道や短歌に精を出していた。年をとったとかもうできないとか、泣きことなど言わなかった母。私のようにあれこれ外出することなく小さな世界で慎ましく粘り強く日を送っていた。ああ、わたしにはあのような老後が過ごせるだろうか。

教会に育てられた私どもは生涯教会につながっていたいというのが切なる願いである。信仰と健康を支えてくださいと、毎朝の食事の時に祈っている。

愛唱誦聖句（いずれも口語訳）

*イザヤ書四一章一〇章

恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたが助け、我が勝利の右の手をもって、あなたをささえる。

*ルカ二四章一五節

語り合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。

*ローマー二章一二節 望みをいだいて喜び、艱難に耐え、常に祈りなさい。

愛唱讃美歌（いずれも五四年度版）

*讃美歌七番

主のみいつと みさかえとを

*讃美歌二八五番

主よ、みてもて ひかせたまえ